

第1章 高岡の歴史的風致形成の背景

1 高岡の自然・社会環境、歴史の概要

(1) 自然環境

高岡市は、本州のほぼ中央で日本海に面する富山県の北西部に位置し、県東部の県庁所在地である富山市に次ぐ県下第2の都市である。北は氷見市、南は砺波市、東は射水市、北西は石川県の宝達志水町と津幡町、南西は小矢部市に隣接する。市域は、東西に24.5km、南北に19.2kmに亘っており、面積は209.57km²を有する。西側は山間地で、海老坂断層で分断された西側は石川県境から続く西山丘陵、東側は古くから信仰の対象として崇められてきた二上山(274m)が連なる。この二上山が絶壁となって接する富山湾は市の北部を囲み、これに面する雨晴海岸は能登半島国定公園に含まれるほか「日本の渚百選(「日本の渚百選」中央委員会選定)」にも選ばれている。東側は、射水平野、砺波平野の一角である水の豊かな穀倉地帯が広がる。平野部西寄りを流れる小矢部川は県内7大河川のうち最も流れが緩やかな川であり、水量が豊富なため、その河口は古くから港として利用されてきた。一方東寄りを流れる庄川は度々氾濫を起こしてきた急流であり、頻繁に河道を変えながら広い扇状地をつくってきた。江戸時代よりこの2大河川は建築資材である木材や米の運搬に利用されたほか、その水運と豊富な水によって川沿いに立地する戸出、福岡町、中田、伏木といった在郷町が発展したと言える。この平野部のほぼ中央に位置するのが、標高15m程度の高岡台地であり、その台地上に2大河川を自然の水濠として高岡城が築城されている。

気候は日本海側気候に属し、四季の変化が割合にはっきりしている。冬期には、暖流の対馬海流上で水蒸気を蓄えた北西の季節風が強く吹きつけるため、北陸特有の曇天の日が多く、降雪量も多いが、年間を通してみると平均気温は14度前後と比較的温暖な気候となっている。

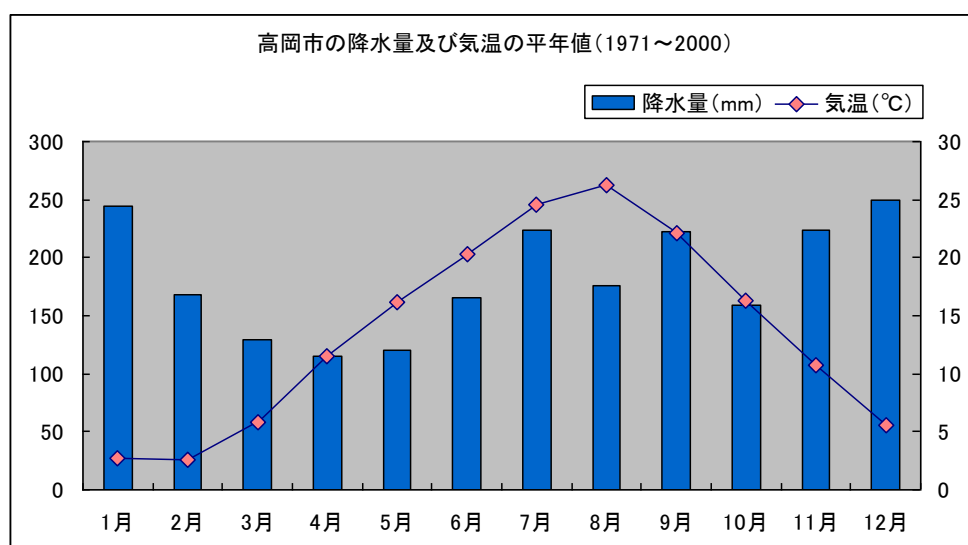


図：高岡市の位置



図：地形分類図 (1/150,000)

高岡市教育委員会「高岡市前田利長墓所調査報告」(平成20年(2008))より転載

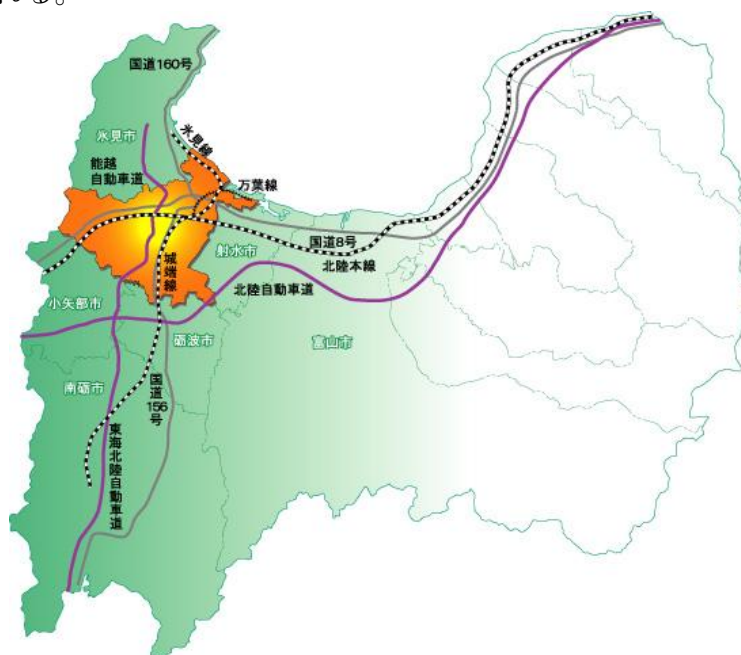


表：高岡市の降水量及び気温の平年値 (1971～2000) 気象庁HP気象データより

（２）社会環境

加賀藩 2 代藩主・前田利長は、高岡に城下町建設の折、当時の主要官道である北陸道を小矢部川の左岸を通過して二上山の麓で小矢部川を渡る（二上渡り）ルートから、今石動で小矢部川を渡り福岡、立野、通町などを抜け高岡を経由するルートに変更し、この道に沿って町割りを行った。高岡城が一国一城令により築城間もなく廃城となった際も、弟の 3 代利常が、武家屋敷跡に町人を移住させ、北陸道のルートを小馬出町で右折し坂下町や定塚町、蓮花寺を通るルートに変更するなどし、街道や河川を通じて物資が集散する商業の町への転換を図った。このとき整備された町並みは、現在も高岡駅から程近い市の中心商業地区としての機能を有している。この旧北陸道を継承し新潟県から京都府までを結ぶ道路が現在の国道 8 号である。国道 8 号は市内を横断する形で延び、四屋交差点からは国道 156 号、国道 160 号が分岐し、それぞれ砺波・岐阜方面、氷見・七尾方面へと繋がっている。高規格幹線道路の能越自動車道は国道 8 号を交差して小矢部砺波 JCT まで走り、高速道路の北陸自動車道と平成 20 年（2008）に全線開通した東海北陸自動車道に接続する。

一方、鉄道網としては幹線鉄道であるあいの風とやま鉄道線のほか、地方交通線として JR 城端線、JR 氷見線が運行し、高岡駅から射水市越ノ潟までを路面電車「万葉線」が結んでいる。更に平成 27 年度には、長野―金沢間で北陸新幹線が開業し、新高岡駅が整備された。海上交通に目を向けると、古くから沿岸交易の要港として栄えていた伏木富山港は、昭和 61 年（1986）年に特定重要港湾（現・国際拠点港湾）に認定され、多目的国際ターミナルの完成、港へのアクセス道路伏木万葉大橋の開通により、今後ますます環日本海交流の要地としての役割が期待される。



図：高岡市の主要交通網

高岡の産業といえば、まず伝統的産業として、約 400 年もの間受け継がれてきた銅器・漆器産業があり、また旧福岡町域の菅笠産業などがある。現在の製造品出荷額で見ると化学工業が最も高く、次いでアルミニウム産業、パルプ製紙工業が続いている。中でもアルミニウム産業は、銅器の鋳物技術を基に、豊富な水資源を利用し昭和初期から発展しており、住宅用・ビル用建材の生産では全国有数の産地となっている。産業全体でみると、事業所数、就業者数とも第3次産業の占める割合が最も高く、商業都市としての性格を色濃く留める。

土地利用は、市域の3分の1が住宅地や商業地、工業地といった都市的土地利用であり、3分の2が農用地や丘陵地などの農業的土地利用と自然的土地利用となっている。本市の市街地は、市制施行（明治22年（1889））当時の市域を中心とした中心市街地と、伏木港を中心とした伏木市街地、戸出・中田・牧野・西高岡、福岡町などの飛市街地で構成される。住宅地は商業地を取り巻く形で形成されており、中心市街地や伏木の既成市街地では、店舗や中小零細企業などが混在する木造密集地域が多い一方、飛市街地では土地区画整理事業や民間開発、団地開発による住宅地が造成されている。また、工業地は、伏木港周辺から小矢部川沿岸にかけての地域、中心市街地西側の金屋地区周辺から小矢部川右岸にかけての地域に広がっており、金屋地区周辺では銅器や漆器の中小工場と住宅等が混在し、戸出・中田及び小矢部川左岸には工業団地が形成されている。商業地は、高岡駅北の中心商業地のほか、伏木・戸出・中田・立野・福岡町にも形成されており、幹線道路沿いにも沿道サービス的な商業施設の立地が見られる。このように、地域毎に独立した市街地の変遷を持ち、土地利用においても地域によって異なる特徴のあることが見て取れる。



高岡市の市街地を南より望む

(3) 歴史

①原始・古代

高岡は、砺波平野や射水平野といった北陸を代表する穀倉地帯を背後に控え、東西は庄川・小矢部川という大河川に挟まれ、北は日本海に面するという、非常に恵まれた環境に立地しており、古くから人々の営みがみられた。

その歴史は旧石器時代まで遡るものであり、古定塚遺跡や岩崎遺跡、小野遺跡などで旧石器時代のナイフ形石器等が発見されている。

縄文期には、狩猟・漁労・採集生活が盛んになり、小さなムラが形成されるようになった。なお、この時代の遺跡は多くが小矢部川の左岸、特に二上山丘陵と西山丘陵の縁辺を成す台地上に点在しており、平野部では佐野台地や高岡台地に多く分布している。

弥生時代中期には、大陸から北九州に伝わった農耕文化が富山県域にも伝わっており、扇状地の末端や微高地、自然堤防上に集落が立地し、近辺の沼沢地や河川流域の低湿地で水田耕作が営まれるようになった。また、この頃から集落の内部で身分階層の分化が進み、指導者が生まれ、有力な集落を核とした地縁集団が形成され、その中心的指導者が豪族や首長へと成長していった。

豪族や首長による支配社会が形成される中で、畿内から広まった古墳文化は高岡市域にも伝わっており、二上山丘陵や西山丘陵には古墳や横穴墓の濃密な分布をみることができる。また、奈良時代には伏木の地に越中国府が置かれ、万葉集の代表的歌人である大伴家持が国守として赴任し、在任中に当地の風光明媚な自然などについて数多くの秀歌を詠んでいる。



大伴家持像



雨晴海岸

②中世

平安時代末期になると、各地で源氏・平氏の争乱が始まり、越中でも在地の武将を巻き込んだ激しい争いが起きており、寿永2年（1183）年には木曾義仲が越中の国府で軍勢をまとめ、倶利伽羅峠で平維盛を破っている。また、平氏滅亡後、源頼朝に追われた源義経は現在の高岡市域を通り平泉に向かったと伝えられ、伏木には義経一行が雨宿りしたという義経雨晴岩や、義経記の一節にも出てくる如意の渡などがある。

高岡市域では、鎌倉時代・室町時代の間には守護所の位置が伏木から放生津、守山と移され、二上山丘陵や西山丘陵には戦国大名の居城として守山城や木舟城、鴨城など多くの山城・平城が築かれている。

また、中世は仏教諸宗が広まった時代で、五山系禅宗寺院や時宗、浄土真宗などの寺院が各地に建てられた。特に浄土真宗は、真宗王国といわれるほどの勢力に拡大した。室町時代後期には一向一揆が各地で起こり、勝興寺など真宗寺院が激しく動いた。



義経・弁慶像



守山城跡・二上山

③近世

城の建設と城下の町立て

現在の高岡の中心市街地の基盤が形成されたのは近世初期のことである。天正13年（1585）、豊臣秀吉より礪波・射水・婦負の3郡を与えられた前田利勝（後の加賀藩2代藩主・前田利長）は、守山城主となり城下に町を築いたが、慶長2年（1597）に富山へと居城を移した。その後、弟の利常へ家督を譲り隠居していた利長は、富山城焼失を契機に、慶長14年（1609）、それまで荒地であった“関野”と呼ばれる地に高岡城と城下町を築いた。これが現在の高岡中心部のルーツである。



高岡城跡

高岡城跡とその周辺は3段の地形面が識別され、上段は末広町・高岡城跡の面、中段は片原町面、下段は川原町面である。利長は城下建設時にルートを変

更した北陸道に沿って碁盤目状に町割りを行い、上段に城と武家地、中段及び下段に町人地を配した。その際、移住町人には土地の無償提供や地代免除などの特権を与え、職種ごとに居住地を割り振っており、今でも利屋町や白銀町などの町名にその名残を見ることができる。また、上段には荒川用水、中段に庄方用水、下段には川原用水をそれぞれ流すことで掘割とし、町域を明確にするとともに、外部に対しての防御線としている。さらに利長は寺社の配置にも配慮しており、曹洞宗・真言宗の寺を防御上の砦として市街地南端に配し、一方で一向一揆を防ぐ目的から浄土真宗の寺を市街地内部に取り込むなどした。



高岡城跡を北より望む（平成 18 年（2006）撮影）

高岡市立博物館提供

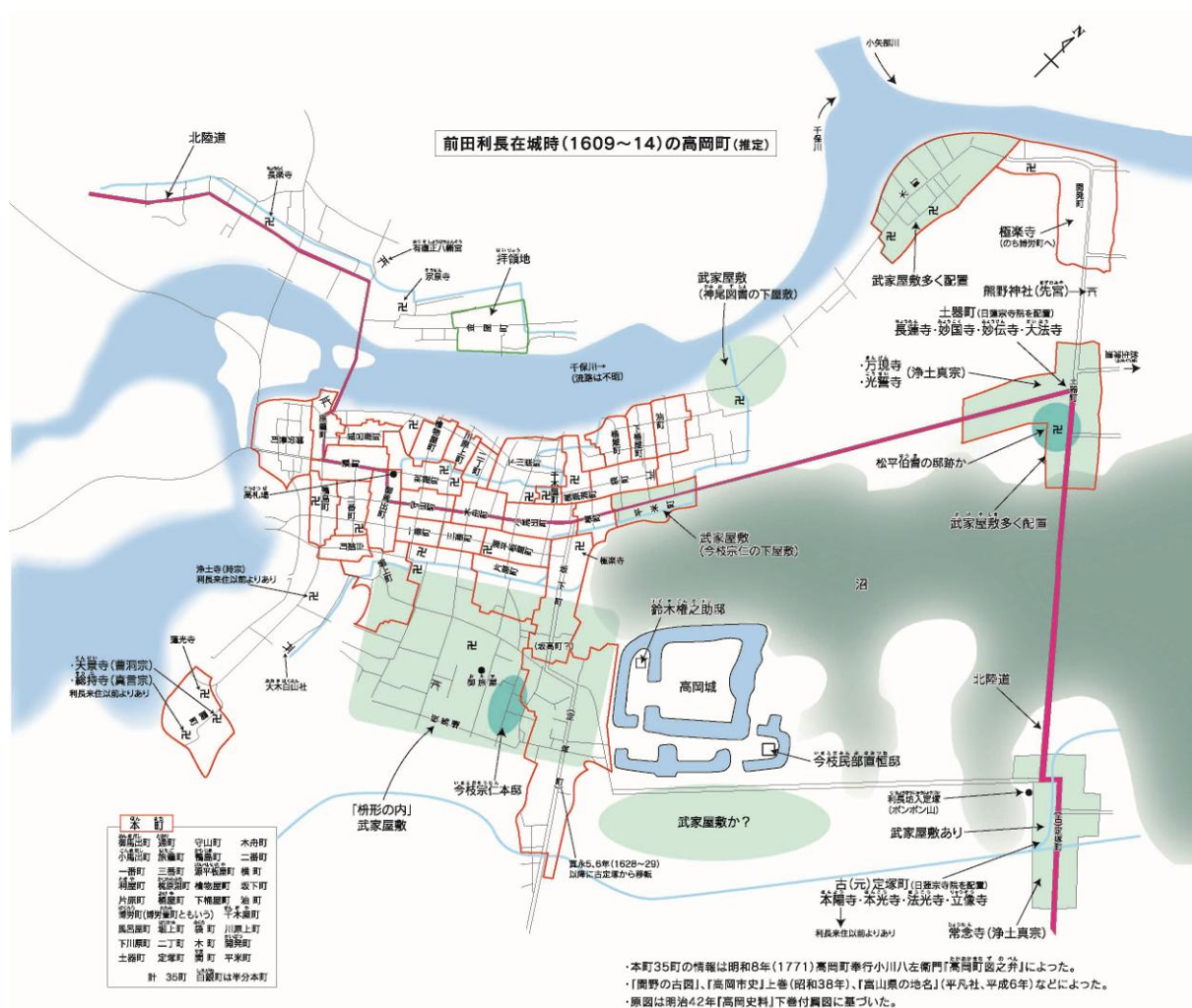
城下町から商工業の町への転換

利長による城下町の建設手法は、加賀藩の藩都である金沢や日本を代表する城下町である江戸などと多くの共通点を有している。しかし、高岡の都市としての発展は、他の城下町とは異なる道を歩いてきた。これは、高岡城が利長の死と元和元年(1615)の一国一城令により、築城後わずかうちに廃城となり、武士を中心とする社会構造が成熟しなかったためで、3代利常による商工振興策や町民らの努力により高岡は商工業都市として発展を遂げることとなった。

高岡城の廃城後、城下の荒廃を憂いた利常は、元和6年(1620)に高岡町人の他所転出を禁じた。その上で、寛永12年(1635)に布御印押人を置き、高岡を麻布の集散地とした。さらに、承応3年(1654)には御荷物宿、明暦3年(1657)には魚問屋や塩問屋の創設を認め、古城内には御収納蔵と御詰塩蔵を設置するなど、高岡の商業都市への転換策を積極的に図った。

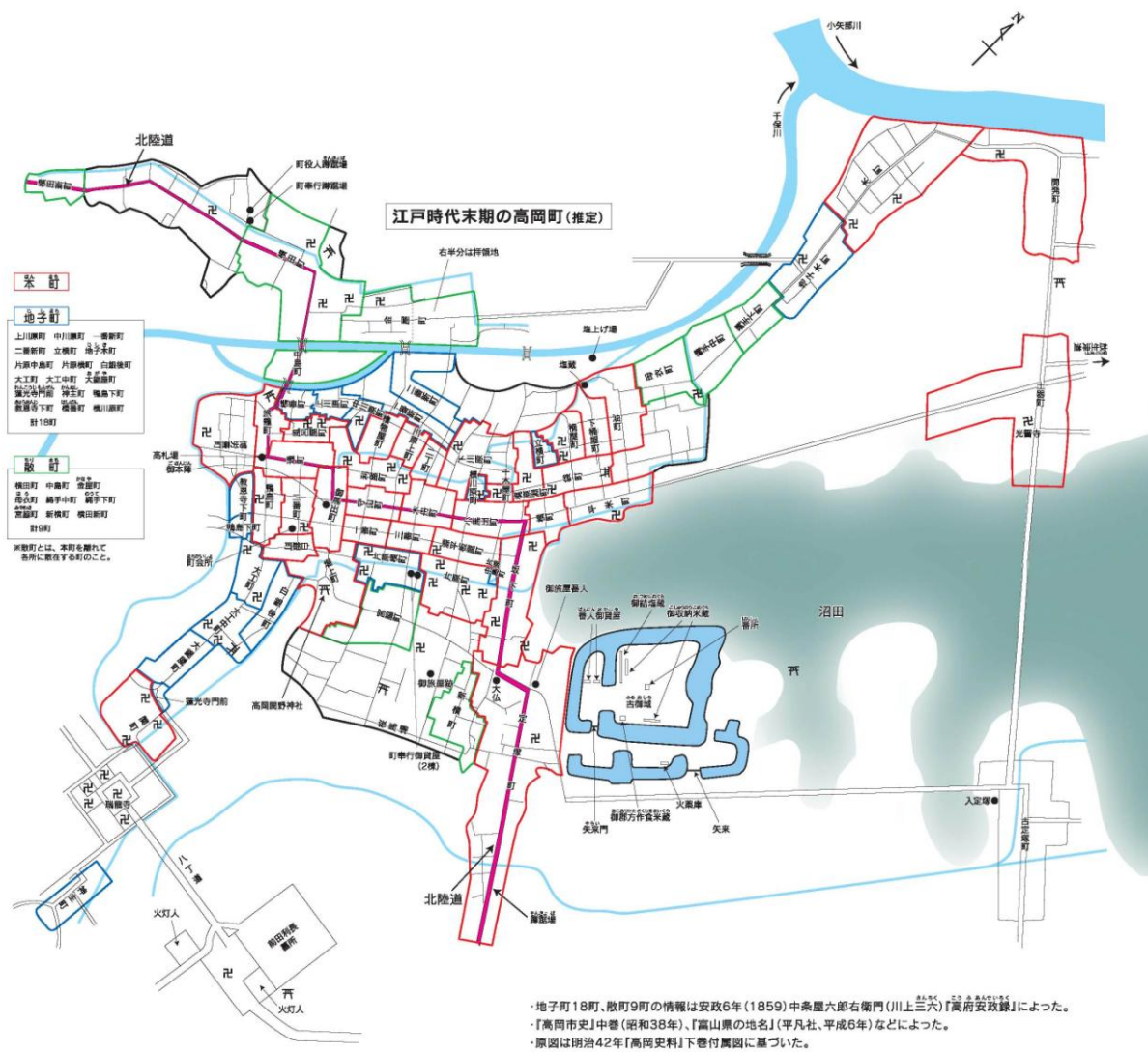
また利常は、城を迂回していた北陸道のルートを町中へ通るように変更し、町の外れにあった寺院群を町中へと移動させ、空き地となった武家屋敷跡に町人たちを住まわせるようにした（地子町）。

加賀藩ではその後も利常の意思が引き継がれ、寛文11年(1671)には締綿市場が設置されるなど、高岡は着実に商工業都市へと変貌を遂げていった。



図：前田利長在城時（1609～14）の高岡町（推定）

高岡市立博物館 常設展ガイドブック（平成20年（2008））より転載



図：江戸時代末期の高岡町（推定）

高岡市立博物館 常設展ガイドブック（平成20年（2008））より転載

たかおか 高岡〈高岡市〉

〔近世〕江戸期～明治 22 年の町名。射水郡二上荘のうち。加賀藩領。高岡町奉行支配。庄川・小矢部川の形成する扇状地の扇頂部に位置し、北陸街道が町域の中央部を南北に通過する。富山湾に注ぐ小矢部川河口は、天然の良港で、のち伏木港として整備される。古くは関野・関野ヶ原・志貴野などと称した荒野であったが、慶長 14 年 9 月、加賀藩 2 代藩主前田利長が当地に築城、魚津から居所を移したことにより開かれた城下町で、京都の方格状の町割を採用。随臣として浅井左馬を筆頭とする 430 余人の家臣と、富山・守山・木舟 3 城下から 630 余人の商工人が移住。地名は「鳳凰鳴矣于彼高岡」という「詩経」中の一節にちなんで付けられたという。利長の死と、元和元年の一国一城令による高岡城廃城、家臣団の金沢への引き上げに伴い、商工人の金沢・富山移転が行われ、一時衰退はしたものの、元和 6 年 3 代利常が、町民の高岡転出を禁止したため物資集散の商都として富山と比肩されるほどに繁栄した。当町は草分けの町人に与えられた拝領地である役町、町人が藩より借り受けた地子町、隣接村地を借り受けて市街地とした請地がある。役町は本町といい無税地。明和 8 年の「高岡町図之弁」（高岡市史）では御馬出町・通町・守山町・木船町・子馬出町・旅籠町・鴨町・など 31 か町、地子町には上川原町・大鋸屋町・大工町・金屋町・など 821 か町、ほかに本町・地子町両方に属する白銀町がある。安政 6 年の「高府安政録」では、役町 29・地子町 19・散町 14。その後、いくらかの町の変動はあるが、近代に入り高岡市市制施行後は 68 か町と称された。「宝永覚書」による地子地は 8 万 4,666 歩。散小物成は御伝馬銀 1 貫 80 匁 2 分 5 厘・蠟燭役 460 匁・たばこ役 387 匁・酒役 437 匁 7 分 9 厘・豆腐役 624 匁・紺屋役 340 匁・室谷役 130 匁・鍛冶役 247 匁 5 分・油屋役 329 匁・長舟役 2 貫 314 匁・渡海船役 518 匁・布判賃 109 匁 7 分・他国出漁三步半口 15 匁 2 分・鮭流網役銀 5 匁・麦大豆口銭 542 匁 4 分 8 厘、定小物成としては高岡網役 55 匁・鮎川役 36 匁、鱒川役 11 匁・唐網役 6 匁・川役 2 匁などがあつた。家数は、慶長 14 年当時は 630 軒といい、明和 8 年頃は、本町家数 1613 軒、地子町家数 1,704 軒人数 1 万 5,582 人の記録がある（高岡町図之弁／高岡市史）。慶長 16 年、利長により金屋鋳物師が招かれてはじまった高岡銅器は、京都真継家から北国筋鋳物師頭役の辞令が与えられ、加賀藩の保護もあり開町以来の伝統産業として現代に継承されている。また明暦 3 年魚問屋と煙草座が開設された。特に魚問屋は三州内の魚獲物のすべてを管掌し、寛文 3 年から新保屋がこの権利を与えられ、明治維新まで越中唯一の魚市場として繁昌した。また当時は射水・礪波の物資集散の場所として、近代に入ってもその機能は衰えることはなかった。明治 9 年石川県、同 16 年富山県に所属。明治 22 年市制町村制により市制を施行。

角川日本地名大辞典編纂委員会／角川日本地名大辞典 16 富山県／角川学芸出版／2009

商工業都市を支えた流通システムと周辺の町々

高岡町の経済基盤を支えた麻布や米の交易を可能にしたのが街道や河川を利用した流通システムであり、これらの街道沿いや河川の流域には、宿場町や在郷町、港町などが発達した。

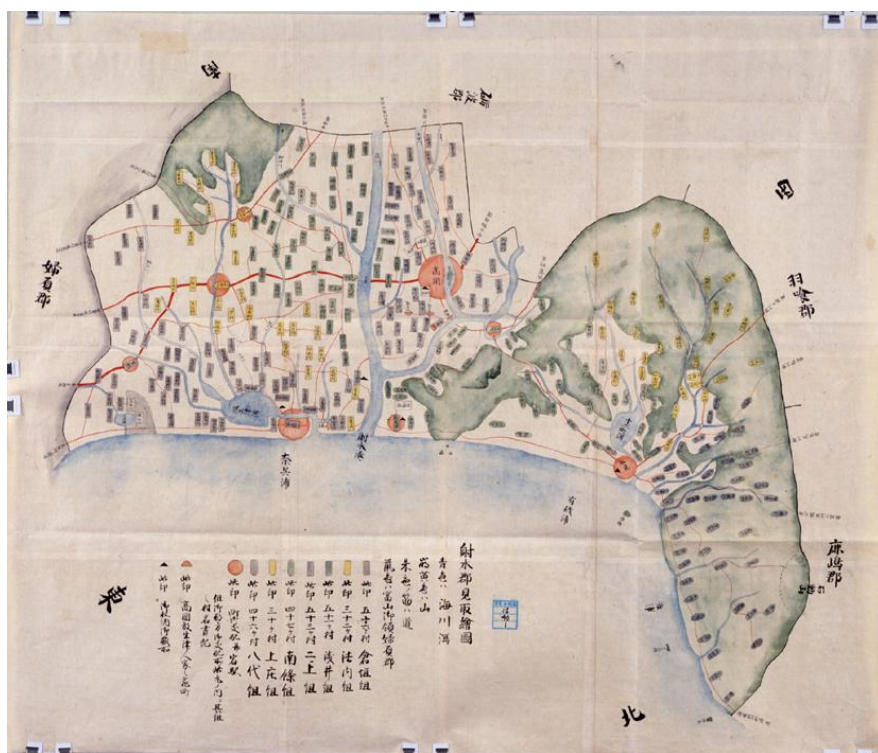
木町は、城下の建設にあたり、利長が最初に町立てに着手した町である。木町は、小矢部川と千保川（当時は庄川の本流）が合流する付近にあり、両河川の合流付近が淵となっていたことから外海船の着岸が可能であり、広大な砺波平野穀倉地帯を背後に控え、他地域間との物資の流通に大きな役割を果たした。正徳4年（1714）に完工した小矢部川からの庄川切り離し工事や、伏木など他の浦方の台頭により次第にその地位は薄れていったものの、近世の早い段階を通して果たした役割は大きい。



木町の舟着き場（大正の頃）

加賀藩は米の効率的な収集と円滑な流通を目的に、主要な河川や街道沿いに年貢米を納める御蔵を設置した。これによって、高岡町周辺の農村地域では、主に街道沿いを中心に、従来の農村という性格に加えて商工業が行われる在郷町や宿場町が形成された。特に、中世まで北陸道の主要往還筋であった戸出・中田往来やルート変更後の北陸道沿いには、福岡新町や立野町、和田新町、戸出村、中田村などが発展した。

一方、小矢部川や千保川を下ってくる米などの終着点であった伏木は、加賀藩から渡航の許可、税の徴収など公的な役割を認められ、北前船（バイ船）を利用した交易により港町として発展した。



射水郡見取絵図（文化5年（1808））高樹文庫蔵



※米場：米の出入や売買を監視する役割を担った。

綿場：加賀藩の主要産物であった木綿の原料綿を供給する役割を担った。

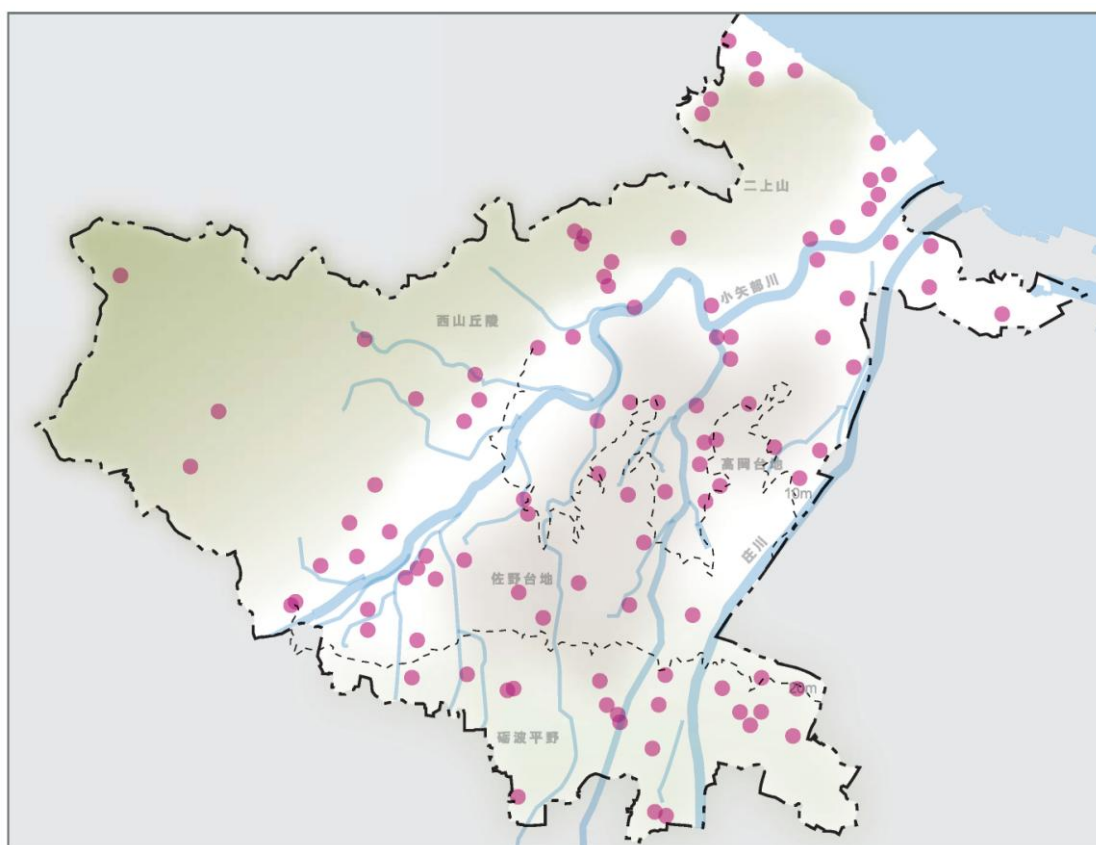
図：米、その他特産物の流通システム

多様な祭礼行事と獅子舞

高岡町域のみならず周辺地域も含めて多様な形態の地域社会が形成された結果、古代からの神道や仏教などの広がりや相まって、様々な祭礼行事が生み出された。高岡町域では、市を代表する祭礼行事となっている高岡御車山祭や御印祭といった町の起源などに深く関わる祭礼行事が生み出され、周辺域では、二上山をご神体とする二上射水神社の築山行事や伏木曳山祭（けんか山）など神社の例大祭に併せた祭礼行事や、田祭り・虫送りといった豊作を祈願する祭礼行事、節句やお盆など季節のお祭り、福岡町のつくりもんまつりなど地域特有の祭礼行事などが生まれた。特に、村落内の神社の春祭りや秋祭りで行われ

る獅子舞は、市の全域に分布しており、本市の民俗芸能を語る上で欠かせないものとなっている。

現在市内にある約 160 件の獅子舞を芸態によって分類すると、おおよそ氷見獅子、砺波獅子、射水獅子、行道獅子の 4 つに分類することができる。氷見獅子はいわゆる百足獅子で、市内では伏木から二上山・西山丘陵沿いの小矢部川左岸地域に多く見られる。曲のテンポが速く活発な獅子舞で、演目はシシゴロシで終了する。砺波獅子は砺波地方から伝播したもので、中田や戸出、福岡地域の一部などで見られる。獅子は胴幕に竹の輪を入れた大型の百足獅子で、シシトリが棒や薙刀を用いてリズムカルに演じる。射水獅子は百足獅子の一種で、上牧野や常国などの庄川右岸地域、庄川左岸の川沿いなどに見られる。射水獅子は氷見獅子や砺波獅子、神通川上流域に多い金蔵獅子などの影響を受けている。行道系の獅子は、神輿行列などの露払い役として、古い箱型の獅子頭が練り歩くものである。市内では、二上射水神社築山行事の源太夫獅子、市指定無形民俗文化財の氣多神社のにらみ獅子がある。



凡例 ● : 獅子舞が行われている箇所

図：獅子舞保存分布

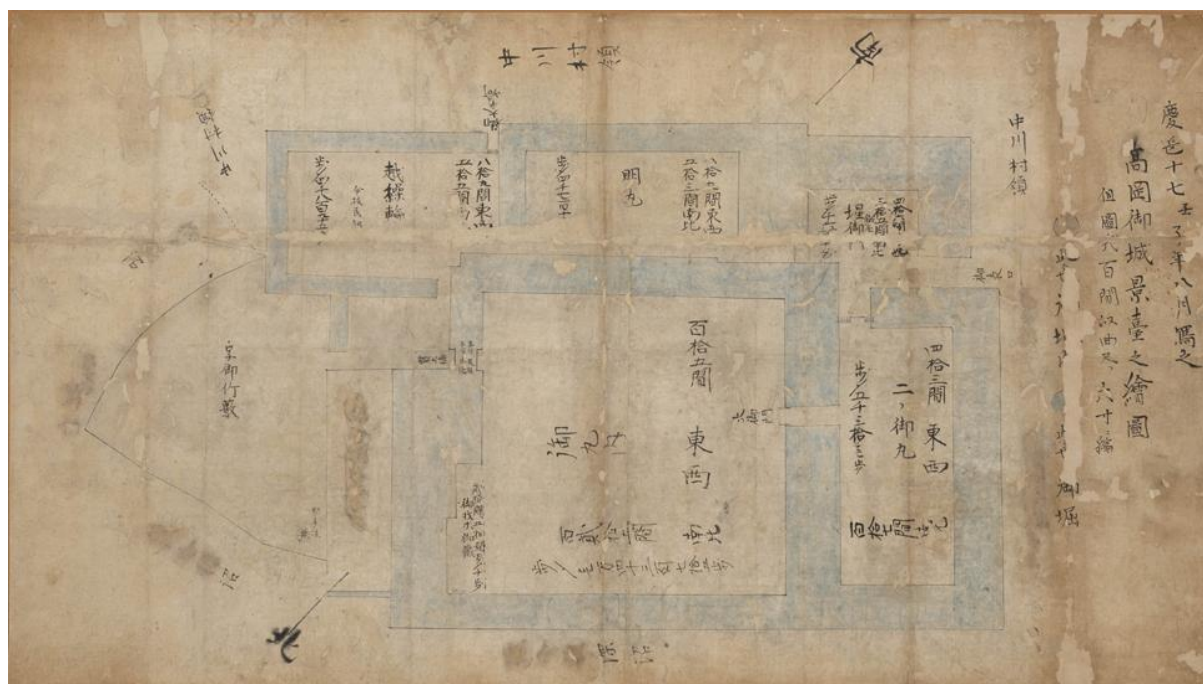
加賀藩ゆかりの伝統文化

加賀藩領である高岡では、お茶や能といった加賀藩ゆかりの伝統文化が庶民の間に深く根付いている。町家では、凝ったしつらえの茶室が多くみられ、日常にお茶が嗜まれ、毎年の行祭事にもお茶会が催されている。能楽では、高岡能楽会といった団体が結成され、瑞龍寺で毎年行われる薪能や燭光能などで幽玄な舞が披露されている。その技術も高く評価されており、野尻哲雄氏及び荒井亮吉氏は、重要無形文化財「能楽」の保持者（総合認定）として認定された人によって構成される日本能楽会の会員となっている。このほか、雪つりなど、地域の自然・風土と密接に結びついた習慣にも高岡固有のものが息づいている。

高岡城の保存と継承

一国一城令により廃城となってしまった高岡城だが、廃城後も城内は高岡町奉行所の管理下におかれ、加賀藩の米蔵・塩蔵・火薬蔵・番所などが置かれ、軍事拠点及び町の核としての機能は維持されていた。明治初期には民間への払い下げによる消滅の危機に瀕したが、服部嘉十郎ら有志の努力により、明治8年（1875）には、射水神社に占有された本丸跡の3分の2近くを除き公園に指定され守られることとなった。

城内に建造物は全く残されていないが、キリシタン大名の高山右近が設計したともいわれる優れた縄張りは非常によく残されており、曲輪や堀も当時とほとんど変わっておらず、こうした点が高く評価され、昭和40年（1965）には、富山県の指定史跡、また、平成27年（2015）には、国の指定史跡となった。また、現在は「さくら名所100選（日本さくらの会選定）」や「日本100名城（日本城郭協会選定）」、「日本の歴史公園100選（都市公園法施行50周年等記念事業実行委員会選定）」などにも選ばれており、市民の憩いの場として、万葉祭りなどのイベントの舞台として賑わいを見せている。



高岡御城景台之絵図（慶長17年（1612）8月写）高岡市立中央図書館蔵

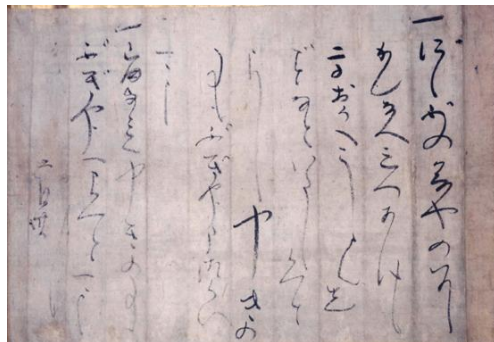


図：高岡城跡・高岡古城公園

高岡のものづくり

現在高岡は高岡銅器や高岡漆器などの伝統工芸と、アルミ産業などの近代産業が融合したものづくりの町となっている。このものづくりの技術もその多くが近世に端を発するものである。

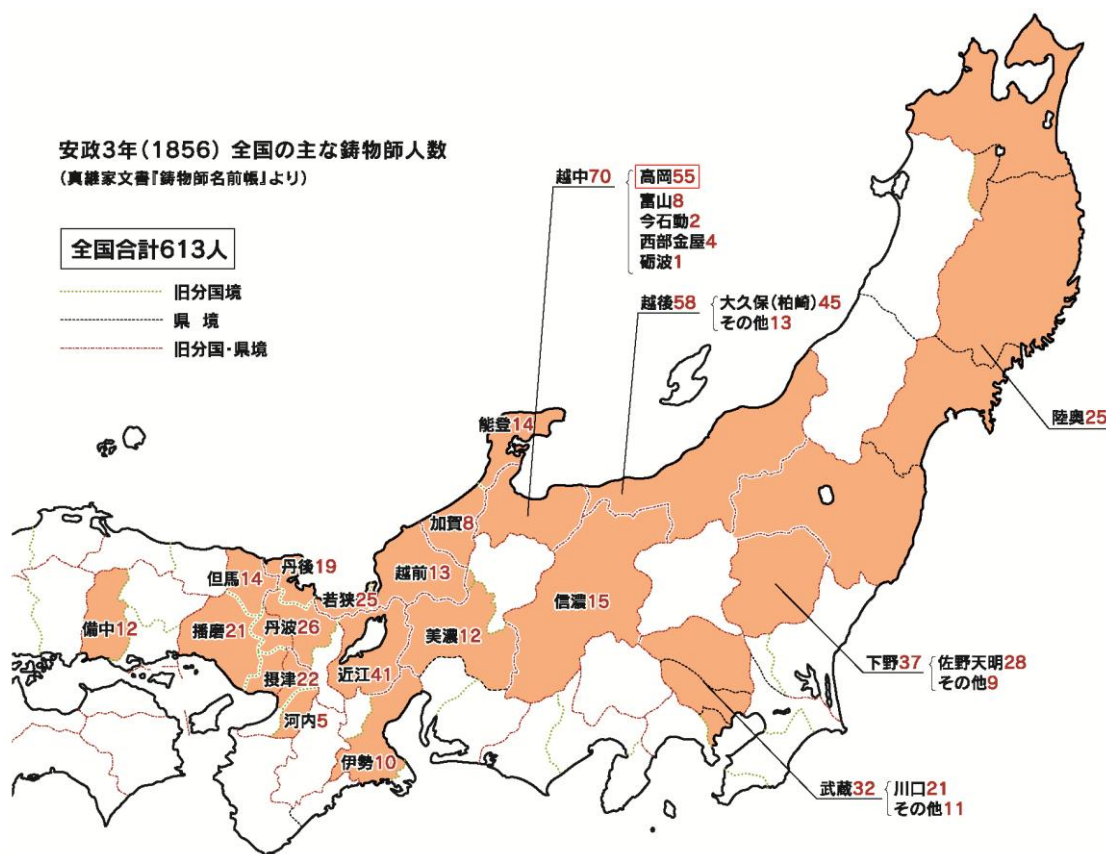
高岡銅器の生産のはじまりは、およそ400年前に利長の高岡入城に際し、城下の繁栄を図る産業政策の一環として始めさせた鋳物生産に見出すことができる。利長は、礪波郡の西部金屋から7人の鋳物師を招き、金屋町の地に無租地を与え、税を免除した。以降、金屋町を中心とした高岡の鋳物生産は、加賀藩の庇護や町民らの努力により、大きな発展を遂げることとなった。



前田利長書状（慶長年間5月30日付）

高岡市立博物館蔵

当初、高岡鋳物の生産は鍋や釜、鋤・鍬といった鉄鋳物の生産が大半で、銅鋳物はわずかであった。これは18世紀初頭に高岡の鋳物が能登など越中国外へ販路を拡げ進出する機会を迎えても変わらず、当時の主要な生産品は塩釜や鯡釜などであった。しかし、近世の早い段階から彫金師や仏具師により、装身具や仏具、仏壇飾りなどの小物銅器もつくられており、18世紀後半になると、こうした彫金師や仏具師の持つ技術と鋳物師の技術が融合し、梵鐘や燈籠のような大型製品から、火鉢や燭台などの日用品、かんざしや煙管などの装飾品といった銅鋳物がつくられるようになった。また製品を売りさばく高岡商人の活躍もあって、高岡は銅器の一大生産地として発展することとなった。



図：安政3年(1856) 全国の主な鋳物師人数(真継家文書『鋳物師名前帳』より
高岡市立博物館 常設展ガイドブック(平成20年(2008))より転載

18世紀後半に本格化し始めた高岡の銅器生産は、江戸時代後期にはさらに全国各地に販路を拡大し、19世紀中頃からは海外貿易も始まった。また、近世には、一つの工房で鋳造から仕上げ、着色といった製造に関わる全ての工程を行う工房制手工業が行われてきたが、明治の中頃には、問屋が個々の職人に注文して商品を製造させる問屋制手工業体制が確立されていた。この頃の問屋は、単に商品を集めて各地に販売するだけでなく、人々の多様なニーズを研究し、その需要に基づいて製造業者に注文を出すなどの努力を続けており、これが高岡の金工技術の更なる進歩を促したと考えられる。多くの名工を擁した高岡銅器は、明治期の万国博等に出品・入賞を重ねており、欧米への輸出が本格化するほどであった。

今日でも高岡銅器の技術は非常に高い評価を受けており、昭和50年(1975)には国の伝統的工芸品の産地指定を受け、平成元年(1989)には金森映井智氏が「彫



武人文様彫金大香炉
(明治10年(1877))
二代横山彌左衛門)
高岡市美術館蔵

金」分野で、平成 17 年（2005）には大澤光民氏が「鑄金」分野で重要無形文化財（いわゆる人間国宝）の指定を受けた。また、平成 23 年（2011）3 月には、「高岡鑄物の製作用具及び製品」が国の登録有形民俗文化財に登録された。



象嵌鑄銅花器（昭和 59 年（1984）
金森映井智）高岡市美術館蔵



鑄ぐるみ鑄銅花器
（平成 11 年（1999）
大澤光民）高岡市美術館蔵

高岡漆器も、開町と同時に始まったといわれる。元禄から享保年間には、八兵衛や吉兵衛ら城端色漆蒔絵の名工を輩出し、江戸中期以降には、高岡工芸漆器の祖といわれる辻丹楓などの名工が次々と現れ、様々な技術を生み出した。また、幕末から明治期にかけて、石井勇助らの名工が現れ、勇助塗や青貝塗などの技法を編み出した。その後も、大正から昭和初期には組合が設立され、生産と販売の近代化が進められた。また、その技術は高く評価され、昭和 50 年（1975）には高岡銅器とともに国の伝統的工芸品の産地に指定された。



福寿文勇助塗飾棚（明治 14 年（1881）
二代石井勇助）高岡市美術館蔵

福岡町の菅笠づくりの起源は諸説あるが、古くは、室町時代の嘉吉年間（1441～1443）ともいわれており、庄川や小矢部川の氾濫による低湿地で自生した菅を利用した蓑作りから始まったと伝えられる。以降、山間を中心に水稻の不適作地を利用し菅を育て、小矢部川の河原や中洲を利用して菅干しが行われてきた。江戸時代には加賀藩の奨励も受けて積極的に生産されるようになり、問屋の大型化や海や川、街道といった流通システムの有効利用により、全国へ販路を拡大した。また、その技術や菅の生産から菅笠の製作までの全工程をこの地域で行っていることが高く評価され、平成 29 年（2017）には「越中福岡の菅笠」として国の伝統的工芸品に指定された。

④近代

商都高岡の隆盛

近代は、近世に生まれた商都高岡が更に大きな発展を遂げた時期である。明治期に入っても、越中における最も重要な産業は米作であった。当地で収穫された米の半分は地元で消費されたが、残りは北海道、東京・京都や大阪に廻米されていた。この廻米を扱っていたのが高岡の米商人であり、その運搬にあたったのが廻船問屋である。

高岡では、明治18年(1885)、それまで金沢にしか設置が認められていなかった米商会所が開業し、豊かな穀倉地帯である砺波平野を背後地とする高岡の米取引が活発化していった。それに伴い、江戸時代から続く山町筋の菅野家を頂点とする大商人や、伏木では藤井家、堀田家などの廻船問屋が隆盛を競うようにさらなる発展を遂げる事となった。彼らは綿や布、肥料などを扱う会社を次々と興した。明治22



高岡米穀取引所 『富山県写真帖』富山
県編(明治42年(1909))より

年(1889)以降、菅野伝右衛門など山町筋の豪商を中心とした銀行の設立、明治26年(1893)の日本海側初の紡績工場となる高岡紡績株式会社の設立、明治36年(1903)には高岡電燈株式会社の設立など、近代産業への転換をいち早く果たした。さらには、明治31年(1898)の民営中越鉄道の開通、同31年(1898)から同32年(1899)の官設北陸鉄道の開通、明治32年(1899)の伏木港の開港場指定など、流通システムの整備も図られ、これが高岡の商業能力の強化に大きな役割を果たした。

この町の発展は、町の中心部で納まるものではなく、近代化の波は周辺域へも拡大した。伏木港では、明治41年(1908)に県内初の化学工場である北陸人造肥料株式会社商業港が設立され、その後も北海曹達株式会社や伏木製紙株式会社など金属・化学・製紙工場などが次々と進出し、北陸で最初の臨海工業地帯が生まれた。古くから八講布と称する麻布の産地として有名であった戸出では、明治期に入るととりわけ綿織物が隆盛になり、明治26年(1893)に戸出物産合資会社が設立された。

教育の分野では、産業・経済分野からの要求に応えるかたちで、明治27年(1894)の富山県工芸学校の設置を期に次々と中等学校が設置された。また、大正11年(1922)には上水道の敷設が初めて提案され、紆余曲折を経て、昭和6年(1931)6月に市内主要部の工事が完成し通水が始まるなど、社会資本の

整備も図られ、経済的豊かさと並行して人々の生活も豊かになっていった。

伏木港の近代化と藤井能三

重要港湾を有する伏木の発展は、民間の活力が生かされた歴史として特筆される。伏木の有力な廻船問屋に生を受けた藤井能三は、明治5年（1872）に発布された学制を機に伏木に学校を開くことを決意、自らの持家を提供し設立に要する費用をすべて立て替えて、県下初の公立小学校である伏木小学校、同9年（1876）には藤井女児小学校を開校した（両校は同20年（1887）に伏木小学校に統合）。また、港湾については、明治8年（1875）に大型汽船の伏木来港を実現させ、同10年（1877）には私費を投じて日本海側で最初となる西洋式灯台を完成させた。藤井能三は、私財を投げ打って伏木町と伏木港の発展と近代化を推し進めた者として、今でも市民の尊敬を集める先人の一人である。



藤井能三肖像（個人蔵）
高岡市立博物館提供

ものづくりの技を活かした近代産業の発達

近代以降、近世から発達したものづくり技術を活かして、科学や産業が発達した。

科学の分野では、アドレナリンの発見と消化剤タカジアスターゼの発明で世界的に有名な高峰譲吉博士を輩出している。高峰博士はこれらの発見・発明のほか、わが国におけるプラスチック工業の草分け的存在であるとともに、富山県の急流河川に着目し、河川の水力による低廉な電力を利用したアルミニウム工業の起業に乗り出すなど、高岡の近代化を科学の分野で支えた偉人である。現在の高岡市の主要な近代産業であるアルミニウム工業は、近世初頭に始まる鋳物の伝統技術と高峰博士らの科学分野が融合して発展したものであると言える。

2 高岡の文化財等の概要

(1) 指定等文化財の分布状況

国指定・選定文化財

市内には7件の重要文化財（建造物）があり、うち1件は国宝である。国宝は「瑞龍寺仏殿・法堂・山門」（同寺のその他の建造物は重要文化財）であり、国指定史跡の「加賀藩主前田家墓所（前田利長墓所）」や「高岡城跡」とともに、加賀藩ゆかりの歴史遺産の代表的なものとして挙げることができる。重要文化財のうち社寺建築は勝興寺など3件、民家建築は武田家住宅や佐伯家住宅など3件であり、建築年代はほとんどが近世のものである。



武田家住宅

また、重要伝統的建造物群保存地区として、明治期に建てられた土蔵造商家や民家の建造物が建ち並ぶ「高岡市山町筋伝統的建造物群保存地区」、明治期以降に建てられ、軒が深く、袖壁があり、サマノコ（千本格子）と呼ばれる格子を建て込んだ真壁造りの町家が多く残る「高岡市金屋町伝統的建造物群保存地区」がある。

そして、重要有形・無形民俗文化財に指定されている「高岡御車山祭の御車山行事」は「山・鉦・屋台行事」としてユネスコ無形文化遺産に登録された。

この他、絵画や彫刻、工芸品といった重要文化財が8件、1件の重要無形民俗文化財、「高岡城跡」を含む3件の史跡、1件の名勝と1件の重要無形文化財があり、高岡の文化財の豊かさを物語る。

県指定文化財

富山県指定文化財として、1件の建造物、16件の絵画や彫刻・工芸品等、1件の無形民俗文化財、4件の史跡、3件の天然記念物がある。1件の建造物は、重要文化財の菅野家住宅と並び山町筋重要伝統的建造物群保存地区を代表する土蔵造民家「筏井家住宅」である。



筏井家住宅

市指定文化財

近世御旅屋の遺構である「戸出御旅屋の門」や伏木の北前船廻船問屋の遺構「旧秋元家住宅（伏木北前船資料館）」をはじめとする5件の建造物、55件の絵画や彫刻・工芸品・古文書等がある。また、2件の有形民俗文化財、2件の無形民俗文化財、古墳や中世城館跡など14件の史跡がある。その他、福岡地区の西山丘陵を中心に1件の名勝、10件の天然記念物がある。また、無形文化財として福岡の「雅楽」が指定を受けている。



戸出御旅屋の門

登録有形文化財

36件の登録有形文化財がある。このうち24件が民家建築、6件が公共施設、3件が社寺仏閣、3件が商業施設などその他の建築である。建設年代はほとんどが明治期以降の近代建築である。

公共施設や商業施設は「高岡商工会議所伏木支所（旧伏木銀行）」や「清水町配水塔資料館旧配水塔」、「旧南部鑄造所キューポラ」などであり、高岡の都市基盤の充実や商工業の隆盛など、都市の近代化の歴史を語る貴重な遺産である。また、登録有形民俗文化財として「高岡鑄物の製作用具及び製品」が登録されている。

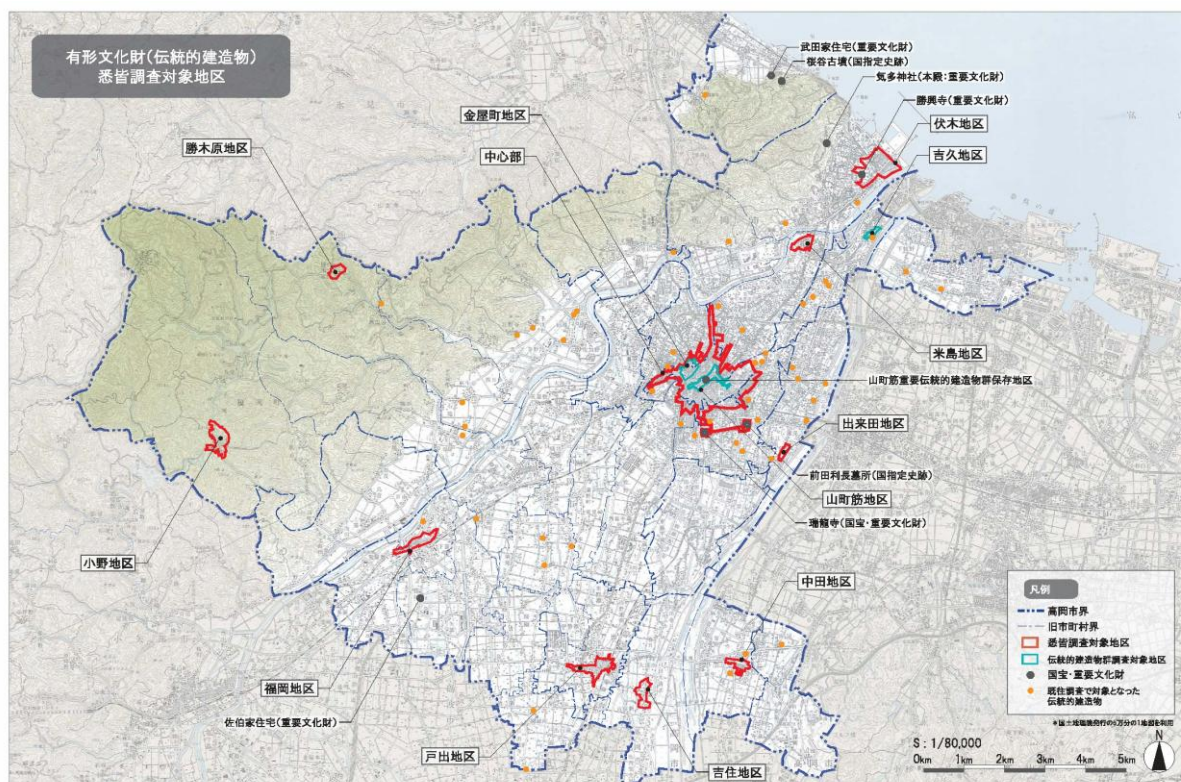
清水町配水塔資料館
旧配水塔**（2）指定等以外の文化財の分布状況**

指定等以外の文化財の分布状況については、平成20年度から平成22年度に実施した「高岡市文化財総合的把握モデル事業」（文化庁委託事業）において、市内文化財悉皆的調査を実施し把握した。

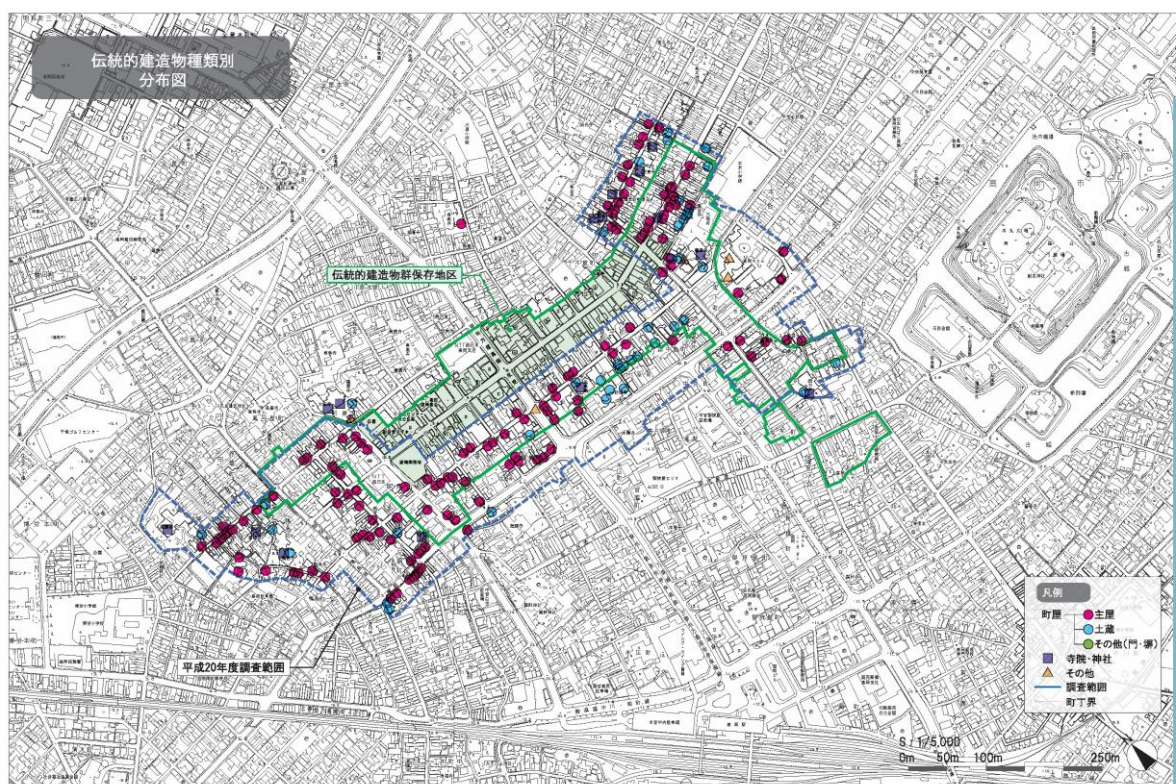
伝統的建造物

伝統的建造物の調査に関しては、伝統的建造物の建築時期や立地特性を踏まえ、「町家」、「農家—散村・集村集落、山村集落」に分けて調査を実施した。調査地区については、上記伝統的建造物の集積度の高いと思われる地区を抽出しており、町家については市中心部・伏木中心部・福岡中心部・戸出中心部・中

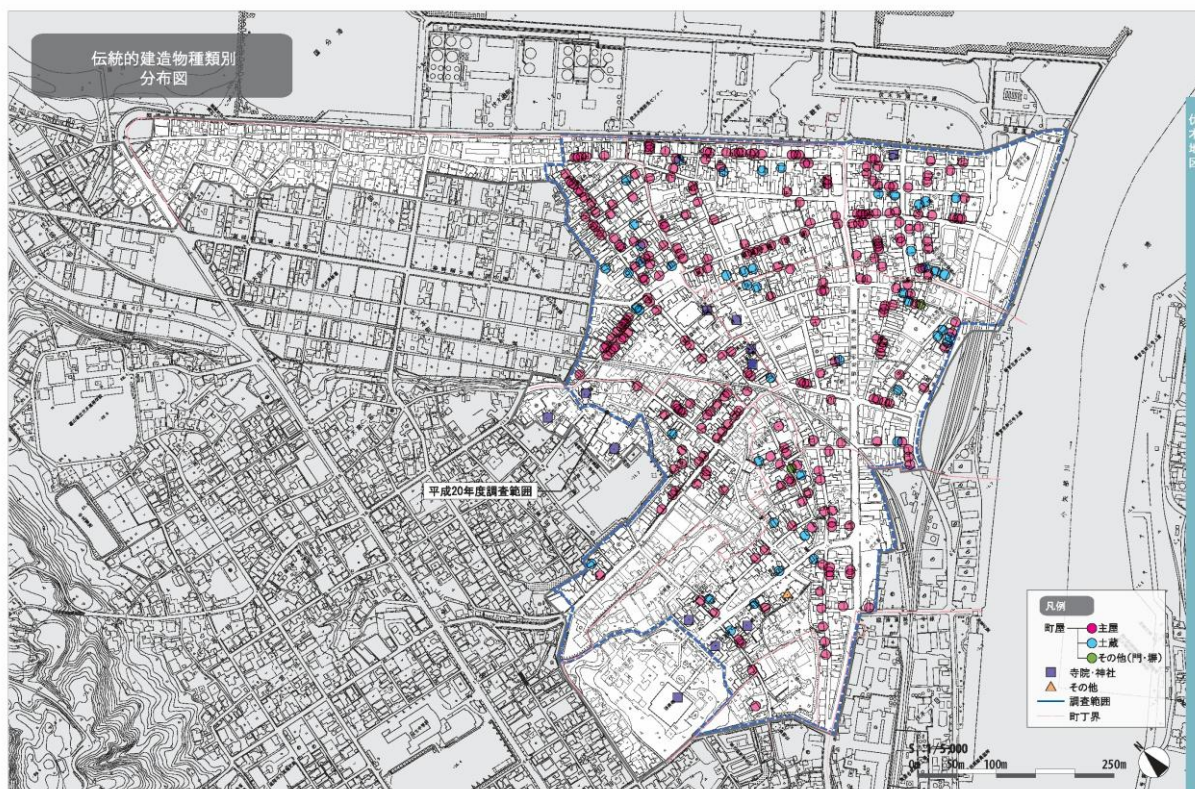
田中心部を抽出した。農家のうち散村・集村集落については戸出吉住地域・出来田地域・米島地域を、山村集落については、勝木原地域・福岡町小野地域を抽出した。調査の対象とする伝統的建造物の建築年代は江戸時代から昭和初期（戦前）までとした。



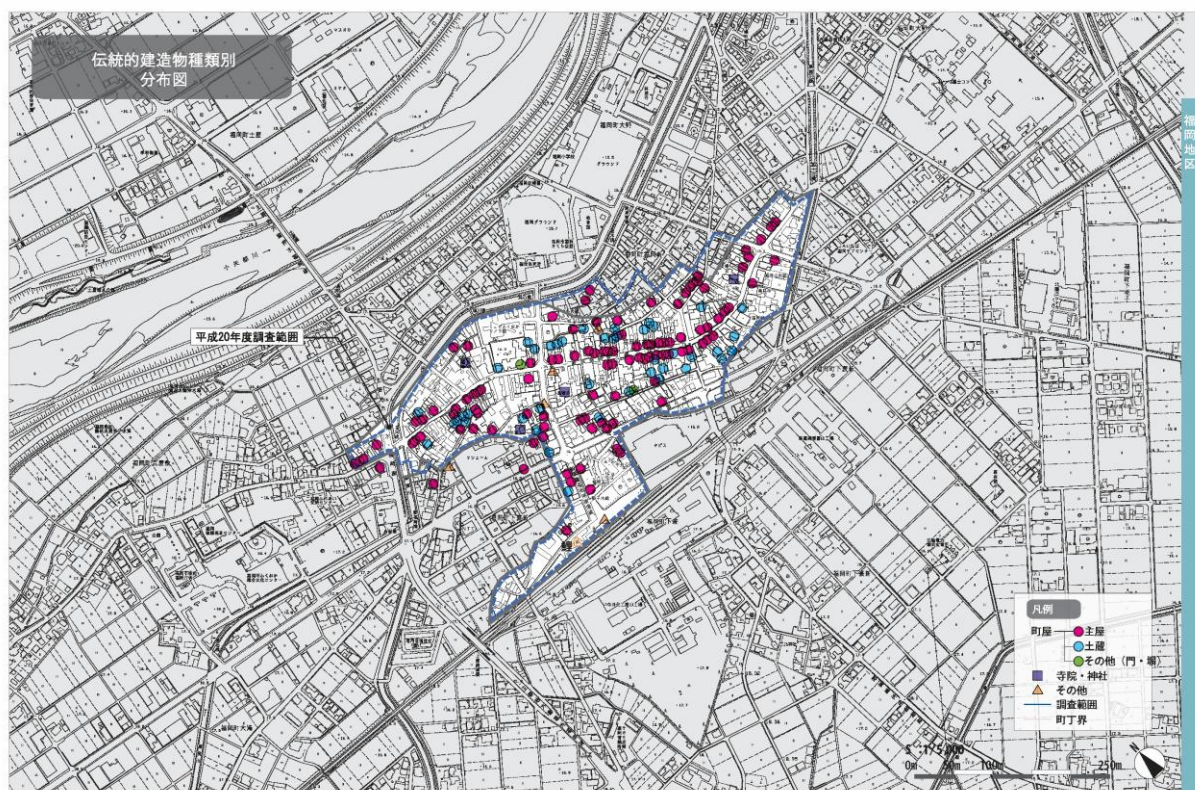
図：有形文化財（伝統的建造物）悉皆調査対象地区



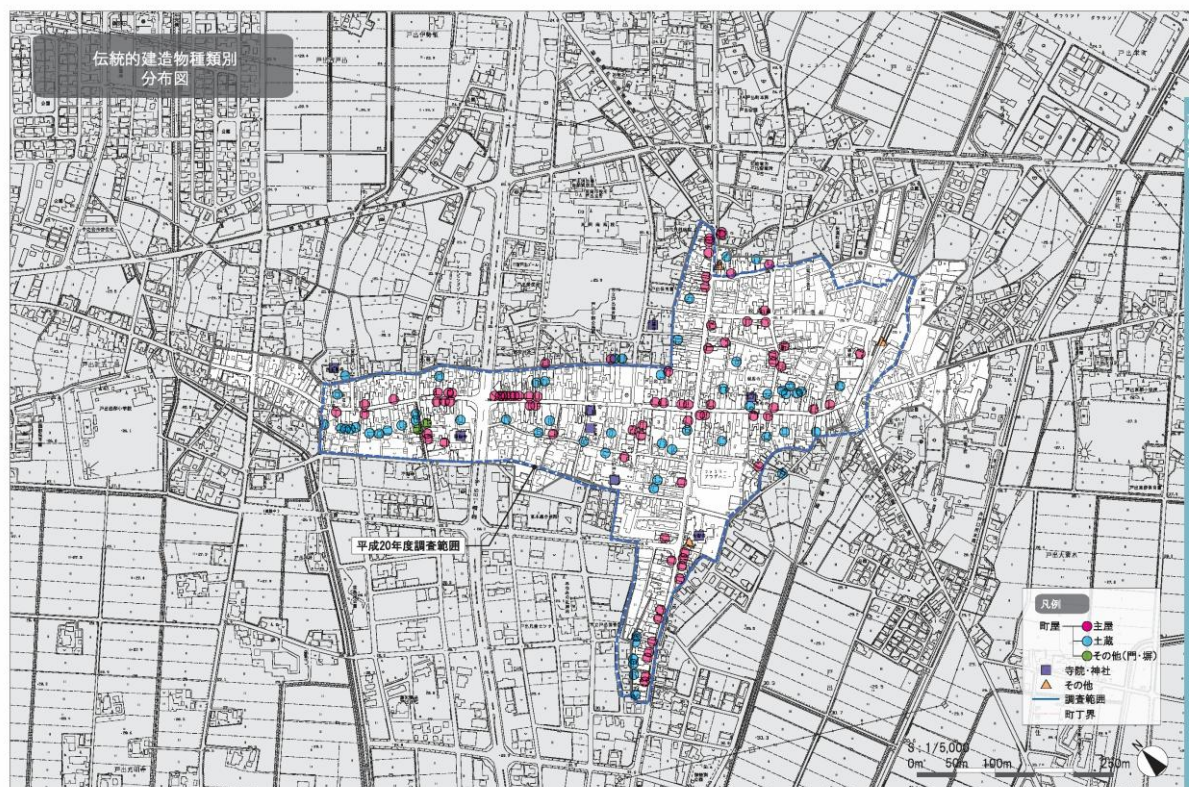
図：伝統的建造物種類別分布（山町筋地区）



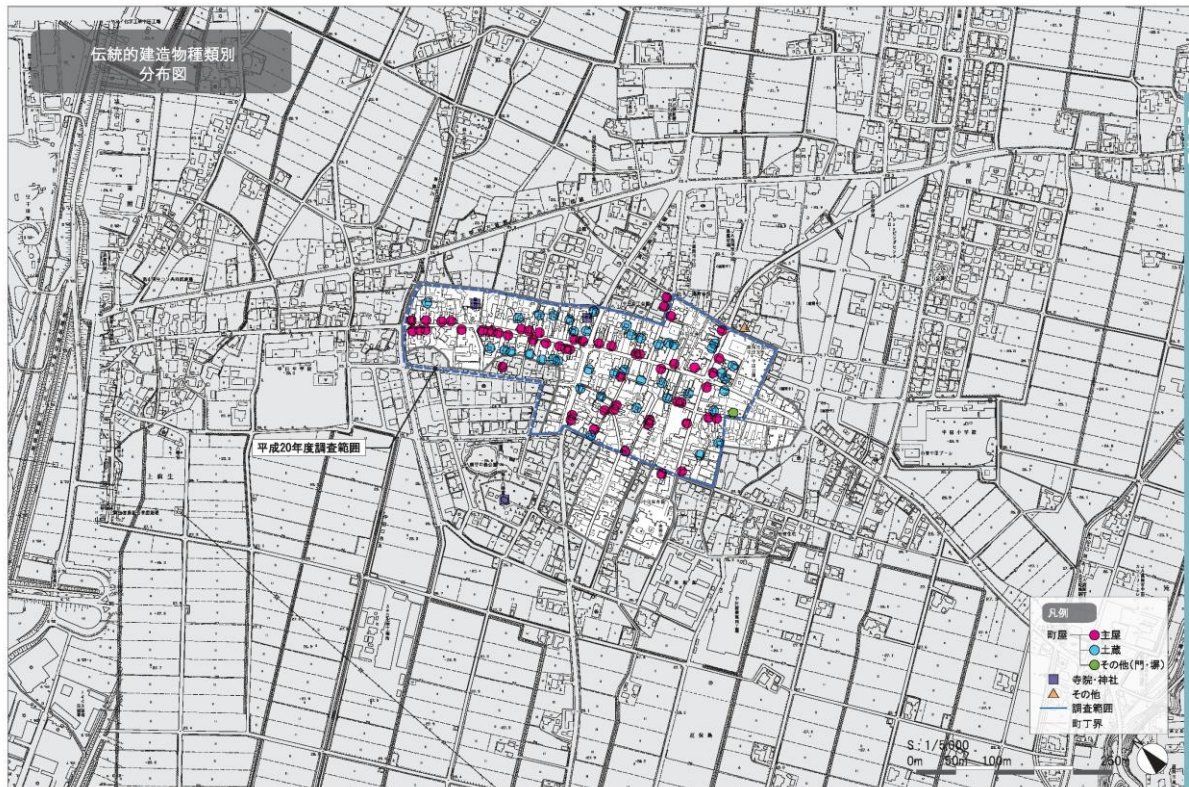
図・伝統的建造物種類別分布（伏木地区）



図：伝統的建造物種類別分布（福岡地区）



図：伝統的建造物種類別分布（戸出地区）



図：伝統的建造物種類別分布（中田地区）

市内文化財悉皆的調査の結果、伝統的建造物については「町家」、「農家」それぞれに次のような特徴があることが分かった。また、社寺建築については、昭和 55 年度に富山県によって近世社寺建築の調査が実施されており、市内でも比較的価値の高い社寺建築の把握が完了している。

i) 町家

市内の町家の多くは大正から戦前に建てられたものが多い。明治のものもある程度みられるが、近世まで遡るものは少ない。

町家は木造真壁造りのものと土蔵造のもの、看板建築とに大別できる。このうち木造真壁造りのものは、中二階下屋庇付き建物においては下屋庇が板葺であり傷みやすいことから大屋根を深く出すために出桁造のものがほとんどである。なお、出桁を支える構造として登梁と腕木があるが、登梁形式は大正以前、腕木形式は大正以降のものが多い。

一方、市中心部では、明治 33 年 (1900) の大火により旧市域の 6 割が焼失し、当時の県令で新築の際は防火構造とすることが義務付けられていたために、山町筋を中心に土蔵造の町家が多い。

看板建築は明治初期に出現し始めたものと思われ、商家のファサードを石や金属板、セメントモルタルなどで覆っている。

ii) 農家

砺波平野や射水平野でみられる伝統的な農家建築の形式としては「アズマダチ」を挙げることができる。このアズマダチは、明治以前に茅葺屋根であったものが屋根を下ろして瓦葺になったもので、散村集落の典型的形式とみなされがちだが、低平地の集村や丘陵地の山村などでもみることができる。砺波市立砺波散村地域研究所によると、この「アズマダチ」は主に明治後期から昭和 45 年 (1970) 頃までに建てられたものが多いが、比較的近年に建てられたものもある。

iii) 社寺建築

昭和 55 年度の調査では、第一次調査として 24 件の社寺建築の調査が実施され、この中から文化財的価値の特に高い移田八幡宮拝殿他、五福町神明社本殿、勝興寺本堂他、国泰寺大方丈他、瑞龍寺山門、総持寺観音堂、西念寺本堂の 8 件について、さらに第二次調査が行われた。

このうち瑞龍寺山門と勝興寺については、その文化財的価値が高く評価され、前述のとおりそれぞれ国宝・重要文化財の指定を受けている。

移田八幡宮は中田にあるもので、拝殿は寛政 11 年 (1799) 松井角平の作と伝えられ、規模は小さいが中門・透垣を備え神域を形成しており貴重である。

五福町神明社拝殿は五福町にあるもので、元は利長の御廟守として建てられた繁久寺の鎮守堂であり、明治初年にこの地に移されたと言われている。近世初期の禅宗様建築の影響を受けた優れたものである。なお、同じく繁久寺の遺構と伝わる拝殿が大手町に残されており、両者とも市指定文化財となっている。



五福町神明社

国泰寺は、太田地区の西田にある臨済宗の古刹で国泰寺派の総本山である。伽藍はほぼ南面しており、総門は西側を向くが、山門、法堂、大方丈は一直線に配される。開山堂を含めそれぞれが近世の建築物で、禅宗の様式をよく残している。また、庭園など建築物以外の伽藍構成要素も優れたものであり、高く評価されている。



国泰寺

総持寺は瑞龍寺の北にある真言宗寺院である。22世の快雄は、利長が関野に入城した際に「高岡」という地名を授けた人と言われるなど、前田家とも強い繋がりを持っていた。観音堂は入母屋造・棧瓦葺の建物で、正面に一間の向拝を設けている。由緒書きには天和3年（1683）再興と記されるが、桃山調の彫刻や壁画の寄進者名からは、慶長の開城前後に建てられたものが、天和に再興されたのではないかと思われる。

西念寺は、立野にある浄土真宗寺院で、はじめは天台宗であったが、応永の頃に一向宗に帰依し、大永2年（1522）本願寺門徒となり西念寺と称した。本堂は文化7年（1810）建立で、正面7間、側面7間半の大規模なもので、入母屋造・平入・棧瓦葺の一間の向拝を付けたものとなっている。



西念寺

このほかにも市内には数多くの歴史的な社寺が残されている。中でも、利長を祭神とする関野神社は、熊野社及び加久彌社、稲荷社が合祀された由緒を持ち、拝殿奥に鎮座する3社の建造物は、それぞれが享保年間や文化年間に修理された記録が残る近世の建物で、このうち加久彌社の社殿は、建築様式や構造材の年代から近世初頭若しくはそれ以前に建てられたものとされている。

伝統的建造物群

市内文化財悉皆的調査の結果が示すように、本市には、多くの伝統的建造物群（歴史的町並み）がある。これらの地区は、かつての主要街道や河川の付近に位置しており、その立地的条件を活かして、多くの物や人が行き交う宿場町や在郷町などとして発達してきたところである。中でも、特に伝統的建造物の残存率が高く、特徴的な性格を持った町並みとして、金屋町、伏木みなと町、勝興寺寺内町、吉久、戸出・中田・福岡町を挙げることができる。

平成24年（2012）12月に重要伝統的建造物群保存地区に選定された金屋町は、利長が城下建設に際し、鋳物師を招き土地を与えて鋳物づくりを行わせた高岡鋳物発祥の地である。利長が町民に与えた拝領地は、長さ100間・幅50間であったが、町の発展に併せて町域も拡大しており、現在では長さ約600m（内免の一部を含む）の範囲に、木造・2階建・真壁造り・登梁形式の町家や土蔵、近代以降の工場跡などが100棟以上残されており、鋳物の町としての風情を形づくっている。

伏木みなと町は、市内を南北に流れる小矢部川と日本海の合流地点に位置する町である。この地では、古代より船を利用した交易が行われており、近世以降は北前船による海運を生業に、多くの廻船問屋が誕生するなど、日本海側の主要な港として発展してきた。近代以降には、次々と港の近代化が図られ工業化が進むなど、国内だけでなく環日本海貿易の拠点として大きな発展を遂げた。町並みの特徴としては、みなと町らしくバラエティに富んだ建物があることが挙げられる。木造・2階建・真壁造り・登梁形式の伝統的な町家から、土蔵造商家や銅板やセメントモルタルがあしらわれた看板建築など、それぞれの時代を象徴する建物が建ち並び、町の歴史を感じさせる。

勝興寺寺内町は、浄土真宗本願寺派の勝興寺を中心に形成された町並みである。勝興寺は蓮如上人縁の由緒ある寺院で、境内地は古代には越中の国庁があった地と推定され、中世には古国府城が置かれており、現在でも境内の周囲には城郭らしい堀と土塁が張り巡らされている。伽藍は本堂や唐門、大広間及び式台など12棟の建造物で構成されており、その全てが重要文化財に指定されている。寺内町には、門前に同寺の子院や役寺、そこから港へと延びる参道沿いには、北村家や高岡市伏木北前船資料館（旧秋元家住宅）が残されている。

吉久は、小矢部川を挟んで伏木の対岸に位置する地で、早くから伏木港の玄関口として発達したところである。江戸時代には藩の米蔵が置かれ、礪波・射水両平野の米の集散地として大きな役割を果たした。町並みはかつての放生津街道沿いを中心に形成され、道路の両側には木造・2階建・真壁造り・登梁形式の伝統的な町家が建ち並び、かつての町の繁栄を偲ばせる。

福岡町の旧北陸道沿いには菅笠問屋の町並みがある。江戸時代以降、福岡町を中心とした小矢部川周辺地域では、菅笠が盛んに作られており、福岡町の旧北陸道沿いは、菅笠の集散地として発展した。町並みは、主に木造・2階建・真壁造りの町家で構成されるが、この地域の町家の特徴として、オイの上に菅笠を保管するための中二階を設けた例が多いことが挙げられる。また、他地域に比べ、大戸や潜り戸など戸口構えをしっかりと残した家が多い。

戸出・中田の町並みは、中世からの重要な街道であった戸出・中田往来を中心に形成された町並みである。戸出・中田往来は、江戸時代になり高岡に城が築かれるまでは旧北陸道の本街道であり、築城後も藩主の鷹狩りの際や幕府が将軍の代替わりの際に全国へ派遣した巡見使の視察ルートともなった。現在は、街道沿いに明治期以降に建設された伝統的な町家が散見される。また、この地域は加賀藩の主要な穀倉地帯である砺波平野の一部でもあり、街道を離れると、砺波平野に象徴的なアズマダチ民家や田園、用水、屋敷林などからなる農村風景が広がっている。

伝統文化

高岡には、加賀藩ゆかりの茶道や能、ものづくりのまち高岡を象徴する高岡銅器や高岡漆器、菅笠づくりなどの伝統産業、北陸の風土を土壤に人々の生活の中で生み出された雪つりといった生活習慣など、固有の伝統文化が根付いている。

前述の市内文化財悉皆的調査では、市の風景や生活文化に寄与しているものを幅広く文化財と捉え、「自然環境」、「生活空間」、「伝統文化」として新たに分類を行った。そこで、伝統文化については高岡市歴史文化基本構想 高岡市の文化財編の90～104 ページ及び市内文化財リストを参照されたい。

(3) 関連文化財群

高岡市歴史文化基本構想では、高岡の歴史や風土を象徴するいくつかのストーリーに関連する文化財を一定のまとまりとして認識し、総体的に価値の顕在化を図るために、次の8つの関連文化財群を設定した。

これらの関連文化財群は、教育現場や生涯学習の場で文化財を学ぶ際に、より深い理解の手助けとなるほか、今後文化財に関連する計画の立案や整備事業などが図られる際に、関連文化財群の特徴や保存・活用の方針に基づいた取扱いを検討することで、文化財本来の価値の損失が軽減するといった役割を果たすことが期待される。

以下に関連文化財群の概要を示すが、詳細については高岡市歴史文化基本構想 保存・活用編の19～61ページを参照されたい。

①商工業の町・高岡の成立と繁栄に関わる文化財群

高岡の商工業都市への成長に大きな役割を果たした工芸技術や流通に関する文化財と、商工業都市への成長の過程で生み出された文化財群

②高岡御車山祭と祭りを支える職人文化に関わる文化財群

高岡御車山に関する山車や巡行路、行事内容、町のしつらえなどの文化財と、山車の華麗な装飾を生み出した工芸技術に関わる文化財群

③高岡鋳物に関わる文化財群

金屋町から始まった鋳物の歴史に関わる文化財群と、その結果生み出された作品などの文化財群

④みなと町伏木の交流と物流に関わる文化財群

古来より小矢部川の水運機能と深く結びつき発達したみなと町伏木に関わる文化財群

⑤勝興寺と寺内町に関わる文化財群

一向一揆の拠点や越中の触頭として強大な勢力を誇った勝興寺と、その門前に形成された寺内町に関わる文化財群

⑥越中国府に関わる文化財群

奈良時代、伏木の地に置かれた越中国府や、国守として赴任した大伴家持などに関わる文化財群

⑦菅の生産と菅笠づくりに関わる文化財群

菅田や菅干しなどの景観、菅問屋の建ち並ぶ町並みや菅笠製作技術など、菅笠の生産に関連する文化財群

⑧農の風景に関わる文化財群

庄川と小矢部川が形成した砺波平野・射水平野で早くから行われた農に関わる風景や祭礼行事などの文化財群